

帰りこぬ風

三 浦 綾 子

主婦の友社

三浦綾子

侵りこぬ風

主婦の友社

帰りこぬ風

昭和四十七年八月一日 第一刷発行
昭和五十四年四月十日 第十七刷発行
定価／六五〇円

著者／三浦綾子

発行者／石川晴彦

発行所／株式会社主婦の友社

東京都千代田区神田駿河台一の六

郵便番号 一〇一

振替 東京二一八〇番

電話東京(03)二九四一一二二(大代表)

もし落丁、乱丁その他不良な品がありましたら、おとりかえます。お買い求めの書店か本社へお申してください。

印刷／凸版印刷株式会社

終	十	九	八	七	六	五	四	三	二	一	序	目次
章	章	章	章	章	章	章	章	章	章	章	章	

233	212	191	171	150	130	109	87	66	45	24	3	
-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	----	----	----	---	--

序 章

一月十七日 土曜 晴 風強し

今日はなぜか、一日淋しかった。淋しさとは一体何なのだろう。何がわたしを淋しがらせるのだろう。原因のない淋しさというものは、へんに不安なものだ。

夕方、勤務が終って帰る時、急に広川さんの顔を見たくくなって、二号病室に寄ってみた。

「千香ちゃん。どうしました？ 淋しい顔をして」

広川さんは、書見器を横にまわして、わたしの顔をじっと見た。ああ、わたしは人にもわかるほど、淋しい顔をしていたのだ。

広川さんはたしか二十八才だから、わたしより六つ年上のはずだが、ずっとずっと年上のような感じだ。何となく、人の心を安らがせるふしぎな雰囲気を持っているからだろうか。

「何を読んでいたの」

わたしは広川さんの書見器をのぞきこんだ。

「モーリヤックのバリサイ女さ」

「モーリヤックが好きなのね」

広川さんは、フランス語でモーリヤックを読んでいた。

「うん」

「バリサイ女って、なあに？」

「そうですねえ、いってみれば、自分は他の人より正しいという意識が、強すぎる女のことかな。人間はみんな、バリサイびとですよ」

広川さんのそばにいてだけで、淋しさが消えた。

「広川さん、毎日臥ねていて淋しいと思わない？」

広川さんは、入院してもう一年になる。慢性肝炎と慢性腎臓炎なのだ。

「淋しくないと言ったら嘘になるでしょうね。でも、病気になったからって、特別健康の時より淋しいということでもないですよ」

そう言って広川さんは、手の指をボキボキと鳴らした。

「わたし、今日はへんに淋しいの。どうしてかしら」

「生きてるって、そんなものですよ。淋しい日もあれば楽しい日もある。いや、千香ちゃんの場合は恋人がいらないからかな」

広川さんはにこっと笑った。いい笑顔だ。こちらの心をときほぐし、微笑を誘う笑顔である。わたしはアンドレ・ジイドの「狭き門」を借りて帰った。民子さんは、もう準夜勤務で部屋を出ていた。

今夜は風だ。ガラス戸が時々鳴っている。

一月二十日 火曜 雪一日降りやまず

ゆうべ、うとうとと眠りかけていたら、準夜勤務を終えて帰ってきた民子さんが、いきなりわたしにとびついてきた。

「どうしたの」

思わず飛び起きると、

「千香ちゃん、わたし、とうとう加沢先生とキスしちゃった」

と、うっとりした顔をしている。

「まあ」

加沢先生は、四十を過ぎた外科医長だ。皮靴をキュッキュッと、誰よりも音たかく鳴らして廊下を歩くきぎな奴！

「民子さん、あの先生には奥さんがいるんじゃないの。外科の山田婦長とだって、ミス外科とだって、噂がある先生じゃないの。どうして、あんな先生に……」

と怒ると、民子さんは笑った。

「千香ちゃんは、まだ恋をしないんだもの、この気持わかりはしないわ」

さくらんぼのような、つるりとした赤い唇をみつめていると、加沢先生のうすい薄情そうな唇が目につかんで腹立たしかった。

男と女って、一体何だろう。男の何に、女の何が惹かれるのだろう。わたしは清い恋をした。い。真実な恋をしたい。二度と繰返し得ない人生なのだ。悔いのない恋をしたいと思う。娯楽室

のピアノの白い鍵盤を十五六本皿に盛って、カレーをどろりとかけ「召上れ」と加沢先生に食べさせたし。

二月一日 日曜 晴 寒さきびしい

準夜勤務。詰所で体温表の記入をしていたら、杉井田先生が入ってきた。

「あ、君が準夜なの」

なぜか先生は、ちょっと驚ろいたようにわたしの顔を見た。

「はあ、何か?……」

「いや、君の準夜とわたしの当直は、今までぶつかったことがなかったでしょう。だから……うれしかったんだ」

杉井田先生は、そう言って、てれたように笑った。わたしは思わずドキンとした。こう言われてドキンとしなければ、ヘルツが故障していることになる。

杉井田先生は、髪をはらりと額に垂らし、いつも、愁いを含んだ目をしているのが（女性の目の表現みただけ）魅力的だ。ちらりと見られるだけでも、胸がキュッと痛くなると、ナースたちや女の患者がさわいでいる。その先生に、こんなことを言われたということ、やっぱり素直にわたしはうれしかった。

「君のうちは、大きな食料品屋さんだってね。ご両親とおにいさん夫婦、二番目のおにいさんは東京、店には店員さんが五人もいる……」

杉井田先生はそう言って、わたしのそばの椅子に腰かけた。いつの間にそんなことを知ったのかと驚ろくわたしに、

「君は二十二才、趣味は読書と音楽でしょう？」

杉井田先生は、わたしの顔をのぞきこむように言った。

「まあ、そんなこと……」

「ぼくは、君に聞いているいろいろと知っているよ。ただ一つ、君に恋人がいるかどうか、これだけはぼくにもわからないけど」

即座にいないと言おうとして、わたしはだまった。

こんな時に、どんな返事ができるだろう。わたしは、ごく平凡な女なのだ。これだけ自分に関心を持たれていると知っただけで、飛び上りたいほどうれしくなる、当り前の女なのだ。けれども、すぐにうれしそうな顔をするほど、無邪気でもない。わたしは多分、当惑したようにうつむいていたと思う。

「君は広川君と親しいらしいけれど……」

しばらくして、杉井田先生はポツリと言った。広川さんは恋人ではない。わたしはただ、あの人のそばにいて、呼吸が楽になるのだ。心が安らぐのだ。でも、わたしはやはりだまっていた。杉井田先生は、何とも言えない淋しそうな目で、じっとわたしを見つめていた。

民子さんの寝息を聞きながら、ここまで書いて、わたしは何となくため息が出た。日記を書くように勧めてくれたのは広川さんだ。わたしは、今日までただ何となく書きつづけてきた。けれ

ども、何だか明日からは、何を書くのか恐ろしいような気がする。

恐ろしいとは何だろう。自分が恐ろしい。他人が恐ろしい。世間が恐ろしい。この恐ろしいという感情は軽薄なのだろうか。こずるいのだろうか。広川さんという人には、恐ろしいことがないような気がする。なぜだろう。

二月七日 土曜 雪

へあなたが口を開いて話すとき、そのことばは、沈黙よりも価値あるものでなければいけない」とはアラビアの格言だそう。沈黙は金という言葉もある。多分、猛烈なおしゃべりな奥さんを持った男が、苦しまぎれにつくった格言にちがいない。

たとえば、その言葉が神様の言葉でも、今日のわたしは、黙っていることができないのだ。二十才の女の子は、おしゃべりのほうがかわいいのです。

今日は病院のすぐそばの、札幌神社の裏で、恒例の職員スキー大会があった。でもわたしは日勤で行けなかった。大きな雪が、ふわふわ漂うように降る窓を眺めているだけだった。

夕方、宿舎に帰ったら、美佐ちゃんが部屋に遊びに来て言った。

「お千香、おこれよ」

美佐ちゃんは体重六十六キロ、身長一メートル七十。男性に劣らぬ体格のせい、男のような口をきくのだ。

「どうして？」

「だってさ、杉井田先生が西原千香子はきていないかって、あちこちで、きいていたっていうからさ」

芙佐ちゃんは、わたしの肩をぐいとおつついた。民子さんも、

「みんなさわいでいたわよ。杉井田先生と西原さんは、そういう仲だったのかとか何とかって。同室のあなたが知らないなんて、ボンヤリねって言われたわ」

などと言った。

「知らないわよ、わたしだって」

わたしが困惑したように言くと、芙佐ちゃんは、

「わかってるよ。杉井田先生が千香に熱を上げてるんだ。千香は女のわたしでさえ、ほれぼれするような、きゅっとしまった体してるし、情熱のないマスクをしてるもん、無理ないよ。好きなら、突進しなよ。応援するよ、ね、お千香」

芙佐ちゃんはその言ってから、じいっと、わたしの顔を見て、

「でもね、男ってなまずい動物だからね、気をつけるんだよ」

と言った。芙佐ちゃんはいいい人だけれど、男を全然信用していない。あとで民子さんが、彼女多分手痛い失恋をしているのよ、と言っていた。

わたしは、つくづく、スキー大会に行きたかったと思う。わたしは高校時代、スキーの選手だったのだ。スキーに乗ったわたしは、多分誰よりも魅力的な存在であつたにちがいない。

ところで、わたしは、杉井田先生が好きなのだろうか。好かれたからといって、好きになると

いうのは、主体性がなさすぎる。あの先生のどこが好きなのだろう。あの、やや憂鬱そうな目だろうか。誰を愛するか。これは一生の一大事なのだ。人生は撰択なのだ。誰を選ぶかは一大事なのだ。

ちょっと分別臭く、そんなことを考えてみたが無駄だった。わたしは、多分、杉井田先生が好きになったのです。

二月十五日 日曜 快晴 珍らしく風なし

日直。

春の日ざしのようなあたたかい日が、どの病室にもいっぱいにさしこんでいた。医師たちはみな日曜で休み。杉井田先生も休み。

夕方、寄宿舎に帰ったら、珍らしく東京の兄からハガキが来ていた。

「ストーブのそばで、ぬくぬくと過す札幌の冬がなつかしいよ。東京の冬は寒い。千香はスキーを楽しんでいることだろう。その暇もないかな。と、ここまで書いてハッと気がついた。やっぱり逆さに書いている。この頃よくやるんだ。こんな不注意な人間でも、プログラマーが勤まるんだから、ひどいよ。捨てるのももったいないからこのまま出す。注射をまちがえるなよ。東京はひどい流感だ。千香もカゼを引くなよ」

ふっと、次兄に会いたいと思った。きょうだいいっていいな。三人いても、四人いても、さぞいいだろうな。ハガキを逆さに書いても、斜めに書いても、何でもいい。兄っていいな。兄のハガ

キ一枚で楽しくなるなんて、安っぽい女でしょうか。

二月十六日 月曜 晴

「この頃、ちょっと、はなやかな噂があるわね、西原さん」

詰所にうがい薬をもらいに来た真野良枝さんが、好意ある微笑を見せながら言った。真野さんは、広川さんと家が近所とかで、親しい間柄なのだ。

「あら、そんな」

わたしは思わずあかくなった。噂って、いつもこうなのだ。本人が何も知らないうちに、話だけが大きく広がっていくのだ。

「西原さん、おいくつ？」

「二十二ですけれど、四月には三になるんです」

「二十三ねえ、わたしより十も下なのねえ」

真野さんは考えるように言って、

「結婚は急ぐことはないのよ」

と言った。どこか、広川さんに似ている人だ。広川さんと結婚したら、きっとすてきなご夫婦になるだろう。

この頃何となく、わたしはうわずっている。日記は青春の記念碑だと広川さんが言った。日記の中で、じっくり自分を見つめなさいとも、言ってくれた。でも、わたしは自分から目を外らし

たくなっている。目を外らしてふわふわしていたい。それもまた、青春の日の正直な姿なのだろうか。

二月二十八日 土曜 曇 あたたかし

五階でエレベーターに乗ると、思いがけなく、杉井田先生が一人だけ乗っていた。思わずわたしはあかくなった。

「帰るの、西原さん」

杉井田先生の手が、背にかかった。一瞬のことだった。が、エレベーターは三階でとまった。四、五人、看護婦や患者が入ってきた。人々の視線が、わたしの上に集まるのを感じた。平気でいようとしても、たった今、背に感じた先生の手の感触が残っていて、わたしはついっむいていた。

地階でエレベーターを降りたら、うしろから名を呼ばれた。ふり返ると、ガウンを着た広川さんが、やさしい微笑でわたしを包んでくれた。うつむいていたので、三階で乗りこんだ広川さんにわたしは気づかなかったのだ。

「お買物？ わたしがして上げたのに」

「うん、この頃、少し動きたいんですよ」

広川さんは、売店のほうにゆっくりと歩いて行った。

誰もいないエレベーターの中で、いきなり人の背に手をふれるなんて、失礼ではないか。わたし

しは、そんな男性は好きじゃない。そう思いたいのだが、今も背中に、あの先生の手がおかれて
いるような、ふしぎな感触が残っている。

わたし自身とは別の感情、肉体の感情があるのを、わたしは今日初めて知ったような気がする。
あのエレベーターで、このまま、先生と二人で地獄まで降りて行ってもよいと思うような、
甘美な大胆な感情が、わたしの中にあったような気がする。

民子さんは、夜、外出することが多くなった。時々、手鏡をじっと見つめていることがある。
民子さんも、悩んでいるのだ。妻のある人などを愛してはいけないのに。

三月一日 日曜 うすぐもり 時々小雪

広川さんの病室に行く。わたしの顔を見ても、広川さんはしばらくだまっていた。

「どうしてだまってるの、広川さん」

尋ねると、

「だって千香ちゃんは、だまってそこにすわっていたんじゃないの」

広川さんは、かなしい程のやさしい微笑を見せた。その通りなのだ。わたしは、広川さんのベ
ッドのそばに、じっとすわっているだけでよかったのだ。それにしても、広川さんって、恐ろし
いほど人の心の動きのわかる人だ。

「わたしね、ゆうべ……」

杉井田先生のことを思って、眠られなかったと、打ち明けてみたかった。けれども、さすがに

ためらわれて口ごもると、

「ゆうべ、よく眠っていないんでしょう」

広川さんは、何もかもわかっている。

しばらくして、広川さんは童話を話してくれた。星の子どもが、湖に光る星を見て、友だちになりたいと思った。そして、神さまにおねがいして下界に降りて来たら、それは自分の姿が湖にうつっていたという童話だった。

夜、九時すぎて民子さんが、外から帰ってきた。酒の匂いをぶんぶんさせている。オーバーも脱がずに、ごろりと横になって、

「あなたのかんだ小指が……」

と歌いはじめた。

「小指が痛い。親指も痛い。中指も痛い。五本の指がみんな痛い。うそ、うそ、痛くなんかありませんよーだ」

呆れてみているわたしを、民子さんは見上げた。ぎらぎらした目だった。

「千香ちゃん、あんた、妻のいる人を恋してはいけないといったけれど、どうして悪いの」

「あなたはいいいと思っっているの」

「いいか、悪いか、そんなことわたしの行動の基準にはならないのよ。わたしにとって大事なのは、自分の感情に正直であることだけよ。好きなことを、わたしはしたいの。ね、千香ちゃん。わたしたちは若いのよ。世の中に気がねなんかしてちゃだめよ。一日一日を完全燃焼させなくっ